ぜいたくな水道を見直す

2013 5/18(日)

佐藤（さとう） 裕弥（ゆうや）さん

厚生労働省新水道ビジョン策定検討会委員

63年生まれ。浜銀（横浜銀行）総合研究所地域経営研究室長。自治大学校で自治体職員に公営企業会計を教えるほか、各地の自治体から水道経営の相談を受けている。

水道は近い将来、「水の道」と言えなくなるかもしれない。

過疎地では飲み水はペットボトルを宅配便で届け、あとは給水車が週2回、地域の拠点まで運んで給水する――。約10年ぶりに全面改訂されて3月に決定した「新水道ビジョン」を読めば、こんな将来像が浮かび上がってきます。老朽化した施設が一斉に更新期を迎え、経験をしたことがない時代に突入しているのです。

日本の水道は、1887（明治20）年に横浜市で通水を始め、隅々まで張り巡らす「水の道」という概念に従って130年間で普及率は97・6％になりました。その考えを大転換したわけです。

水道は独立会計で、利用者の水道料金で賄っています。数十年前に埋めた水道管の更新期を迎えていますが、ほとんどの自治体は費用を積み立てていません。とくに人口が減少する過疎地の簡易水道の経営は苦しい。例えば8町村と合併し、山間部の水道も経営することになった松江市水道局は、28の簡易水道を抱えています。その借金（起債残高）は112億円、料金収入はその20分の1。それでどうやって運営していくのか。旧市部で集めた料金で補填（ほてん）することに中心地の住民の理解を得られるか、という問題もある。

「2・4％の未普及地域」では、現在でも給水車で運んでいます。浜松市天竜地区では沢水や井戸水を生活用水として使っていますが、濁ったり、枯渇したりしたときには住民の要請で給水車が出動します。一回あたり500円。1～2立方㍍の給水タンクに注水する。こうした地域が増えていくでしょう。

視点を変えれば、飲み水はペットボトルでいいのかもしれません。フランスでは水道会社が「安全な水」を供給しますが、飲用の容器に入れた水は1000年以上前から普及しています。

最近、日本では新たな投資をして「おいしい水」を追求する自治体が増えてますが、家庭で飲む水は1割以下です。「おいしい水」でお風呂に入ったり、トイレに流したりしているわけです。そうでなく、水道局は手洗いやシャワー程度の衛生管理の水を提供するのです。

すでに、トイレには（上水と下水の間の）「中水」として別の配管で供給する団地もある。独自の浄水装置を配備して排水を循環させ、井戸水も確保している企業もあります。水需要の減少が問題になっているが、水道のあり方を考えさせるきっかけにもなっています。

高度成長時代には「ぜいたくな水」をジャブジャブ使っても文句を言う人はいませんでした。でも人口減で料金の減収は確実です。過剰な水道施設と水に対する価値観を見直し、新しい「水社会」を練り直すチャンスかもしれません。

（聞き手・菅沼栄一郎）

（朝日新聞　2013/5/18）